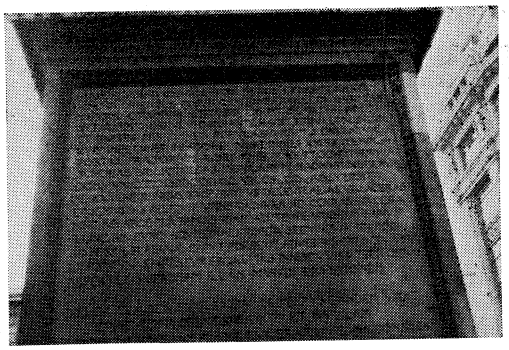

ンも焼いていたジョンの家から出た。火は忽ち「盛な勢で四方にひろがり，信じ難いほどの轟音をあげつつ寺院の89をはじめ，市の門，市庁舎（つまりギルド・ホール），公会所，慈善院，学校，図書館，ならびに無数の街区を焼き払い，損害は民家13.200，街路の400に及んだ。市区26のうち15は根本的に破壊せられ，8つは半焼けとなって荒廃した」。

風は北東より吹き風下にあたるロンドン橋—これはテムズに架(かか)る当時唯一つの橋であった—も，朝の8時には橋上にあった家並(やなみ)に火がついた。夕方には Canon St. を焼き，三日目にはセント・ポール寺院さえ火の手を受けた。市庁舎も焼け，今も地名に残るテンプル僧団の大きい本拠も焼かれ，火は当時の監獄であったフリート街の堀の源に伸びて，市の廃墟は436エーカーにに上った。「未曽有の炎上」はこうして「花と栄える都を瞬時にして無に帰しつつ」，四日目，ようやく下火になったのである。

碑の文章はなおずっと続くけれども，この文章はいかにも読みづらい。それは古典期のラテン語の格を保とうとしながら，句の立て方にも意味の運び方にも古格のリズムがないからである。いやそればかりではない。さきの九月二日という日付も半ば古典的な書き方であるが，正格の古典語では決してあの書き方はしない。フリート街に火が「伸びた」というところも，はじめ PERREXIT と彫って，あとで第一のEに重ねて0を彫りなおさせている。porrexit を perrexit とするのは，誰でもよくやる誤だが，後者の形もずっと上代では全くなくはないのだから，強いてEに重ねて0と彫る不様をさらす必要もなかったのである。

ことばの上から何かと心にかかる碑文であったが，今度ばかりは正午の出発を控えて，便利な大英博物館の図書室で調べなおすいとまもなかった。　（文学部教授）

附属図書館報告書を総長に提出

本館では，京都大学における図書行政のあり方について広く全学的見地から根本的な検討を加えていくため，39年11月から京都大学附属図書館改善特別委員会を設置した。この委員会の審議経過については，本誌上にその都度報告されたが，この委員会で開陳された多くの貴重な意見をふまえ，このたび附属図書館の実情とそれが改善されるべき目標ないし構想を具体的に掲げ，今後の図書行政を推進していくため，堀江館長から総長あてに「京都大学附属図書館報告書」が提出された。

報告書はB5版30頁余の小冊子であるが，京都大学附属図書館の今後のあるべき姿が明確に打出されたものとして注目をあつめている。ここに打出された構想の実現には多くの困難があると思われるが，その実現は京都大学における研究・教育の推進のための不可欠の条件である。ひろくご精読いただくよう期待している。

電子複写（Xerox）業務の開始

かねてより一般の要望のあった電子複写業務は4月1日より業務を開始した。機械の性質上湿気を嫌う関係から地下室には置けないので，新聞閲覧室を改造してその作業室とした。いうまでもなく文献複写は迅速を貴ぶものであるから，できれば待っている間に即座に複製ができれば最も理想的である。数年以前から日本に輸入されている Xerox 914型はこの理想にかなうものであって，すでに本館でも事務用文書やカードの複写には一昨年より利用していたが，今回2台を設置して一般の需要にも応じようとするものである。

申込受付は新しくできた電子複写室で行ない，持参の資料は，量の少いときは即座に複写して渡すことができる。料金はB4版1枚30円となっている。

尚，マイクロ複写の受付は従来通り地下の文献複写室で行なっている。